２０２４年（令和６年）１２月２３日　月曜日

デーリー東北　１２面　掲載

関川（光星高）２位

スポーツクライミング ボルダー「THE 1」

スポーツクライミングのボルダー競技大会「THE 1」が21、22の両日、東京都杉並区のボルダリングジム「B-PUMP OGIKUBO」で行われた。女子は関川愛音（八学光星高）が日本人最高の2位。優勝はジェニファー・バックリー（スロベニア）、3位は野中生萌だった。

「チャンス逃した」

焦点

予選トップ通過の関川は決勝で第1、3課題を完登し、誰もゴールにたどり着けなかった最後の第4課題はゾーン（中間点）到達を一発で成功。たった一つ。「強い気持ちで登れたのは成長した部分」と関川。「余計なトライが今回で良かったと考えて、2月のジャパンカップまでに仕上げたい」と成長を誓った。

○…頂点まであと一歩だった。関川愛音（八学光星高）は予選を首位通過し、決勝で2完登4ゾーン（中間点）到達を記録したが、完登のトライ数で競り負けて2位。「チャンスを逃してしまった」と唇をかんだ。

予選は四つの課題全てで完登し、この上ないパフォーマンスを見せていた。

決勝第1課題、「ホールド（突起）を持ち直そうと体を動かして滑ってしまった」。ゴールまで過ぎ、結果的に3回を要し、ここでのトライ数が勝敗を分けた。

それでも最難関の第4課題は、実力者の野中生萌が8回目で成功させたゾーン到達を一発でクリアし、精神面での成長をパフォーマンスで披露した。

一方、ボルダー競技は25年に転換期を迎える。完登、ゾーン到達数による競争から、2月のジャパン杯以降はポイント制に変更。完登25点、ゾーン到達10点とし、6人だった決勝枠を8人に拡大する。

完登ゼロでも1完登を順位で上回る可能性がある新ルールについて、関川は「オールマイティーな選手が有利になるが、全て登り切れば関係ない。登ることだけに集中する」と、自身への影響は少ないと話した。

高校に入り、「学校がすごく協力的で、思う存分練習できている。より集中しやすい環境になった」。新年の目標は「まずは2月のジャパン杯優勝。そして来年こそはW杯で決勝に残りたい」と力強く語った。

（桑田友人）

2位入賞で笑顔を見せる関川愛音

【女子決勝】関川愛音は第4課題、最初のトライでゾーン（中間点）に到達する＝東京都杉並区の「B-PUMP OGIKUBO」

「悔しい思い、つなげられた」

W杯シリーズ　参戦2年目振り返る

スポーツクライミングのボルダー競技で活躍する、八学光星高2年の関川愛音が22日、東京都内で本紙取材に応じた。ワールドカップ（W杯）シリーズ参戦2年目となった2024年について「上との差は大きかった」と振り返りつつ、「悔しい思いを今につなげられている」と前向きに語った。

関川は今年2月のジャパンカップで7位となり、W杯4大会に出場。決勝（準決勝上位6人）進出を目標に掲げたが、6月のインスブルック大会の10位が最高だった。

「振り返ると上との差はものすごく大きかった」。実力者がパリ五輪に照準を合わせている中、上位に食い込めなかったことに悔しさは募った。

W杯後、コーチとの話し合いに時間を費やし、「気持ちの部分で『強く登る』と意識し始めた」。22日の大会では、他の選手が苦戦する課題を軽々とクリアし、精神面での成長をパフォーマンスで披露した。

一方、ボルダー競技は25年に転換期を迎える。完登、ゾーン到達数による競争から、2月のジャパン杯以降はポイント制に変更。完登25点、ゾーン到達10点とし、6人だった決勝枠を8人に拡大する。

完登ゼロでも1完登を順位で上回る可能性がある新ルールについて、関川は「オールマイティーな選手が有利になるが、全て登り切れば関係ない。登ることだけに集中する」と、自身への影響は少ないと話した。

高校に入り、「学校がすごく協力的で、思う存分練習できている。より集中しやすい環境になった」。新年の目標は「まずは2月のジャパン杯優勝。そして来年こそはW杯で決勝に残りたい」と力強く語った。

（桑田友人）

来年2月のジャパンカップでの優勝を誓う関川愛音

だ、完登に要したトライ数でバックリーに及ばなかった。

男子は決勝で唯一、1完登した安楽宙斗（JSOL）が頂点に立った。

同大会は日本山岳・スポーツクライミング協会公認。今年3回目で、関川やバックリーらは招待選手として最終日の22日から参戦した。（桑田友人）

デーリー東北新聞社提供